

1978年夏期講習の御講話(15)

神の恩寵は山のような罪を 焼き尽くすことができる

まぶたに塗った軟膏が眼球には触れないように、
食べ物の中の油が舌には触れないように、
蓮の花が自らの生じた泥には触れないように、
アートマは、自らの周りにあるどんなものにも触れることがない

愛の化身である皆さん！

陶器の壺は泥から作られますが、アートマ〔真我〕は何か別の物質から作られているわけではありません。カード〔凝乳〕は牛乳の変化した産物ですが、アートマは他のどんなものの変化の産物でもありません。アートマはどんな臓器も超えています。どんな臓器もアートマの起源ではありません。ラジャス〔激性〕とタマス〔鈍性〕を有していないブッディ〔理知〕の助けを借りた時、初めて私たちはアートマを理解することができます。アートマの至福はブッディを通してのみ体験できるのです。

ある村へ行くために旅を始めた人にとって、目的地に到着して初めてその旅は終わりとなります。それと同じように、アートマを探求している人にとって、その人がアートマを体験した瞬間が探求の終わりとなります。アートマにはどんな種類の仕事も関係ありません。時おり、月と私たちの間に、雲がかかって邪魔をします。この邪魔になる雲を吹き飛ばすには風が必要です。それと同じように、月に例えられるブッディ〔理知〕とアートマの間には、時おり悪い思いや悪いグナ〔属性〕という形をした雲がかかります。それらを吹き飛ばすには、何らかのカルマ、行為をする必要があります。そのような行為をすることにより、私たちはブッディの助けを借りてアートマの側面を理解できるのです。

二種類のサムスカーラ、すなわち浄化があります。一つはグナ〔属性〕に、もう一つはドーシャ〔汚れ〕に基づいたものです。グナの浄化は、実のなる木に水をやるようなものです。二つ目〔ドーシャの浄化〕は悪い性質を取り除くようなものであり、鏡の表面のほこりを払うことに例えられます。鏡をきれいにした後初めて自分を見ることが、二番目の型の浄化の特徴です。鏡にほこりが積もっていては、自分の姿をはっきり鏡で見ることにはできません。汚れを取り除くことがそれに必要な仕事です。

果実を収穫するために果樹に水をやり肥料を与えることは、ウパーサナー・カーンダ〔礼拝の道〕と呼ぶことができます。私たちがする日常の仕事を神に関わるものとして行うことは、カルマ・カーンダ〔行為の道〕の側面です。神聖な愛と神へのプレーマを与える行為、そして、それによって神を求めることは、ウパーサナー・カーンダ〔礼拝の道〕と呼ばれます。ウパーサナー・カーンダ〔礼拝の道〕とカルマ・カーンダ〔行為の道〕の助けによって心の不純物を取り除き、それによってアートマを見るというプロセスは、絶対に不可欠なプロセスです。これは、アートマの御姿を創り出し、私たちに悟り〔解脱〕の至福を与えてくれます。

そうした御姿は、際立った美しさと特徴を持って現れます。この神聖な美は特定の姿形を持ちませんが、それでも万人を惹きつけることができます。ゴーピカー〔牧女〕たちはその御姿の美を体験し、それと引き離されると苦しみました。それと共にあるときには、彼女たちはそのような大いなる至福の状態にありました。ゴーピカーたちは、普通の人間がどのようにこの道を歩み、アートマの体験につながる至福を楽しむことができるのかを実証しました。

テルグの詩聖ポータナは、アヴァター〔神の化身〕のその側面を描写しています。彼は、クリシュナの顔を月になぞらえ、目を魚になぞらえて表現しました。クリシュナの肩は蛇になぞらえられました。クリシュナの腰はライオンの腰になぞらえられ、クリシュナの足は蓮の花に似ていると述べられました。そのようにしてクリシュナが描写されると、蛇や魚、月やライオンや蓮の花は、少々恥ずかしくなりました。月は、自分とクリシュナの輝く顔に似ているところなどあり得るだろうかと不思議がり、そう見なされていることを恥ずかしく思いました。月は逃げ出して、空に身を隠してしまいました。魚たちは、自分たちと星のように輝くクリシュナの瞳が比べられるわけがないと言い、その思いゆえに水中深くに身を隠してしまいました。クリシュナの肩は柔らかく、幅広かったので、蛇たちはなぜそのような肩が自分たちに例えられたのかと、不思議がりました。蛇たちは赤面し、蟻塚に潜って身を隠してしまいました。ライオンもまた、自分の腰とクリシュナの美しい腰では比べ物にもならないと思い、きまり悪くなってそこから立ち去り、森の中へ身を隠してしまいました。蓮の花も、自分たちと主の立派な柔らかい御足は比べ物にならないと感じ、その思いから水の中に潜ってしまいました。

同じことが、ヴィヤーサ仙によって少し異なった形で描写されています。ヴィヤーサ仙は言いました。「二つの蓮の花と二頭の象が立って遊んでいる。この二頭の象の間には一頭の大きなライオンが座っている。そのライオンの上には大きな池があり、その池の真ん中には大きな山がある。その山の上には月があり、そ

の月の中で二匹の魚が遊んでいる。月の周りには黒い蜂たちが絶えずブンブンうなりながら飛び回っている」。ヴィヤーサ仙によるこのクリシュナの描写は、先ほど話した描写とよく似ています。この中で、〔クリシュナの〕二本の足は二つの蓮の花に、臀部の二つのふくらみは二頭の象になぞらえられています。その二頭の象の上にはライオンのような腰があり、その腰の上には池になぞらえたお腹があります。そして、その池の上には胸の山がそびえています。その胸の上には顔である月があり、その顔の中で明るく輝く両目は、遊んでいる二匹の魚です。黒い巻き毛は顔の周りでブンブンうなる黒い蜂たちになぞらえられています。詩人はその黒髪を、神々しい顔の微笑みの中にあるハチミツを取りにやって来る黒い蜂たちであるかのように見立てているのです。

ゴーピカーたちはその美しい姿を見て、これが尋常の美であるはずがないと気づきました。彼女たちは、それは神なるものの至福に結びついた美でしかあり得ないという結論を下しました。どれほど探しても、ゴーピカーたちの行動や思いにはどんなグナ〔属性〕や執着に関わる側面も見つからないでしょう。パラマートマ〔至高のアートマ〕であるクリシュナには、そのような特質はまったく見られません。グナを超越しているパラマートマは、時おり、グナを持つ人々に何らかの事を教えるために、彼らの次元まで下りて来るのです。

これに関して、若い学生諸君が容易に理解できるように別の例を挙げてみましょう。ある人は高い教養を身に付けているかもしれませんが。しかし自分の息子に教育を始めるとき、その人は息子のために自分の手でアルファベットの文字を書いて見せます。その時、なぜそれほど高い教養を身に付けた人がアルファベットを書くのかと不思議に思う必要はありません。アルファベットを知らない幼い少年のため、彼はそのレベルまで下りていってそうするのです。同様に、全知全能のパラマートマは、無知な人間たちにさまざまな観点を教えるため、時おり人間の姿を身にまとうのです。

しかし、神なる主に到達するのは容易なことではありません。人間にとって、ここには深い重要な意味があります。普通の人間の愛を育てる場合でも、皆さんはさまざまな困難や問題に遭遇することがあるでしょう。であれば、神の愛を手に入れるために数多くの困難や障害に遭遇したとしても、何も驚くことはありません。この理由から、牧女〔ゴーピカー〕たちは、神の愛を得る過程で自分たちは数多くの困難を経験したと言ったのです。ヴィヤーサ仙も、それと同じことを、もし神の愛が欲しいのであれば他のものへの愛をあきらめなくてはならない、と述べて表現しています。他のものへの愛をあきらめるなら、神の愛を手に入れることは簡単であり、どんな困難に遭遇することもないでしょう。他のさまざまな形の愛に縛られているなら、神の愛を手に入れたいと思っても、数多くの困難に

直面するでしょう。この過程は「全託」と呼ばれてきました。

明るい光を見るとその明るさに惹きつけられ、命さえ落としてしまう虫たちがいます。音楽に惹きつけられる鹿は、音の方へ近づいていって罠にかかります。蜂は、蓮の花の中の蜜に引き寄せられて、捕らえられます。それと同じように、もし主の愛がほしいのであれば、自分自身をすっかり神に全託する覚悟がなければなりません。自分の肉体にどんな執着も持つべきではなく、自身の誉れや尊敬にどんな注意も払うべきではありません。これらすべてから完全に切り離されていなければなりません。そうして初めて、あなたは主に近づくことができるのです。心は完全に主に集中しているべきです。この全託の高いレベルに上がるまでは、バジャンやディヤーナ〔瞑想〕といった神聖で清らかな活動に参加し、プレーマ〔真の愛〕の側面を育てなくてはなりません。あなたが至福の状態にあり、あなたの神への愛が結実し、実を結ぶとき、神の恩寵はあなたに注がれるでしょう。ゴーピカーたちは、主に近づいて主の恩寵を獲得するために、さまざまな困難を経験し、いくつもの人生を通過してきたのです。

私たちは、クリシュナを連れていくためにアクルーラ〔クリシュナの親族〕がやって来たときにゴーピカーたちが経験した動揺の大きさを、ある程度理解すべきです。アクルーラは、バララーマとクリシュナを馬車に乗せ、二人をカムサ王のところへ連れて行こうとしていました。ゴーピカーたちは、アクルーラ〔残酷でない人〕という名前は彼にふさわしくない、彼はその名の意味に反して実に残酷である、と感じました。牧女たちは、なぜアクルーラは牧女たちの主を連れ去って、これほど大きな苦悩を引き起こすのだらうと思いました。

この別離の悲しみゆえに、ゴーピカーたちは駆け寄って馬を捕まえ、さらには、馬車の車輪が動かないようにしようとしました。ゴーピカーたちの悲しむ様子を見て、クリシュナはどうにかして彼女たちを喜ばせたいと思い、御者に馬車を引き返すよう命じる振りをしました。それを見て、ゴーピカーたちはとても喜んで、全員が馬車の後ろに回りました。この状況を利用して、クリシュナはそっとアクルーラに速く馬車を進めるよう合図しました。ゴーピカーたちは必死に奮闘し、大声で叫びながら言いました。「ああ！ クリシュナ、どうか戻って来てください。あなたは帰依者の守護者、弱き者の守護者と言われています。なのに、あなたは私たちを残して行ってしまおうとしています。これがあなたの良い性質と美德の結末なのですか？ 人に何と言われようと、どれほどの困難に見舞われようと、私たちはあなたに祈ることを決してやめませんでした。あなたには私たちへの慈悲がないのですか？ 私たちはあなたに全託しています」。

ゴーピカーたちはそのような気持ちで泣いて、ゴークラム〔牛の里〕村へは戻

りませんでした。彼女たちは食べることも眠ることもせずにそこに留まりました。この状況の中、一人の聖者が彼女たちに近づいて言いました。「そなたたちは愛、プレーマの本当の力を理解できていない。プレーマは常に多くの困難と悲しみを伴うものなのだ。果実に含まれている果汁の甘さを味わいたいなら、苦い皮をむいて、中にある食べられない種を取り除かなくてはならない。そうして初めて果汁を味わうことができるのだ」。これは、私たちが肉体上の人間関係を手放した時、初めて主の恩寵が得られることを示唆しています。この教訓の道徳は、主の愛が欲しい人は、他のすべての種類の愛を完全に手放さなければならないということです。

もし本当に主の愛を手に入れたいなら、私たちの中にある悪い思いを追い払わなくてはなりません。あなたは何冊もの本を読み、数多くの講話を聞いていますが、あなた自身のハートと振る舞いの中にもたらされるべき変化には何の注意も払っていません。私たちは、教えている側の年長者たち、あるいは、講話を聞いている側の学生たちのどちらか一方に変化をもたらしことを目指しているのではありません。人は、百万の理想を説教することはできますが、そのうちの一つでさえ実践しないのであれば、何の役に立つでしょう？ 皆さんはクリシュナとゴーピカーたちの信愛の物語を聞いていますが、それが自分にどんな変化をもたらしただかを調べるべきです。バーガヴァタは、人間の中にある神性の個々の側面のつながりを悟らせてくれる聖典です。聞いたことのほんの一部でも実践に移す努力をするとき、初めて私たちのサーダナは意味のあるものだったと主張することができるでしょう。

肉体への執着を持っているゴーピカーがいなかったわけではありません。そのような牧女でも、神性への道を高いレベルに置いて、常に神聖な道を取り入れていました。クリシュナがゴークラム村のすべての家を訪れるのはいつものことでした。クリシュナはどれほど多くの姿でもとることができたのです。しかし、当時クリシュナは7歳くらいで、ゴーピカーたちは30歳ほどでしたから、誤解される余地はまったくありませんでした。ゴーピカーたちには、クリシュナに対して弟や息子に抱くような執着さえありませんでした。彼女たちはクリシュナを神の化身と見なしていたのです。このため、そして、クリシュナがまったく邪悪な思いを持っていなかったため、クリシュナは自由にゴーピカーたちの家に出入りしていました。

ある時、クリシュナはやや遅い時間に、あるゴーピカーの家に行きました。その時には夫はもう眠っていました。しかしクリシュナには何のためらいもなかったので、ドンドンと扉を叩きました。人目を盗んでこっそりやりたい人だけが、恐怖を抱いて事を為すものですが、クリシュナにそんな恐れはなかったので、大

きな音でドンドンと扉を叩いたのです。ゴーピカーたちは、家の扉にのぞき穴をつけており、夫や姑たちは、のぞき穴の存在を知りませんでした。これには隠れた意味があるのですが、それは後ほど話しましょう。クリシュナがそのようにして扉をノックしていると、そのゴーピカーは世俗の事柄にいくらか執着を持っていたため、こう答えました。「おお、クリシュナ！ どうかしばらく待ってください。私の夫はまだ眠りに落ちていないので、もう少ししたら扉を開けます」。ゴーピカーたちは、主への全託はとても迅速に、何も案じることなく為されなくてはならないということが、よくわかっていました。昨今の帰依者たちは、自分たちの困難が取り除かれないと、神に異議を申し立てたり、不信任決議〔信じられないという決断〕を下したりさえするでしょう。

私たちが見る映画や、読む本の中には、クリシュナは常にゴーピカーたちに嘘をついたり、だましたり、そうすることで牧女たちを自分の願望に従わせていたかのように描いているものがあります。それらは、クリシュナは何のモラル〔道徳〕もないありふれた泥棒であるかのように、さまざまに描いています。バーガヴァタの中では、ゴーピカーたちとクリシュナの間にあるつながりは、ハートとハートの神聖な絆として描かれています。それ以上の誤解の余地はありません。彼らは互いに完全に溶け合い、自分たちの肉体に関わるどんな感情も持っていませんでした。そのような場合にどんな歪曲があり得るでしょう？

愛の側面を育てることによって神に到達することが、最も容易な道です。私たちの心から悪い思いを取り除くためには、毎日神を思っていくらかの時間を過ごす特別な努力をしなければなりません。毎日の 24 時間のうち、私たちはほぼ 23 時間 59 分を無駄にしています。少なくとも毎日数分間は神を思って時を過ごす努力をすべきです。山のように大きな綿（わた）の俵も、小さなマッチの火を点ければ完全に焼き尽くされるでしょう。私たちは山のような罪を犯してきたかもしれませんが、主の恩寵の小さな一筋の光が注がれば、あなたの罪はすべて焼き尽くされてしまうでしょう。主を思い、主への奉仕をしてあなたの人生を送りなさい。

サイババ述

Summer Showers in Brindavan 1978 Ch15